

鼎談

Tripartite Talk

- 河田恵昭（人と防災未来センター長、関西大学理事・社会安全研究科長・社会安全学部長・教授）
 - 臼井真（神戸市立明親小学校教諭、音楽による震災の語り継ぎ）
 - ティン・エイ・エイ・コ（「ティンミャンマー」ランゲージセンター校長）
-
- KAWATA Yoshiaki (Executive Director of DRI / Trustee and Professor of Faculty of Environmental and Urban Engineering, Kansai University)
 - USUI Makoto (Teacher, Meishin Elementary School, Kobe; engaged in Telling Live Lessons through music)
 - THIN AYE AYE KO (Director, Thin Myanmar Language Center)



Summary

The Forum began with the open tripartite talk by Dr. KAWATA Yoshiaki, Executive Director of Disaster Reduction and Human Renovation Institution (DRI), Dr. Thin Aye Aye Ko, Director of Thin Myanmar Language Center in Myanmar, and Mr. USUI Makoto, Teacher, Meishin Elementary School in Kobe, Japan.

Dr. KAWATA stated that after the 1995 Kobe Earthquake he came to believe that the researchers of disaster reduction must face disaster victims and ultimately aim at bettering the society; and stressed the importance of such research as “implementation science”.

Dr. Thin Aye Aye Ko presented her activities in her home country, which she is conducting by making use of her past experience in Kobe as a disaster victim then; and she manifested the possibility of worldwide chain of assistance whereby a former disaster-stricken place later extends assistance to a newly stricken place.

Mr. USUI stated that, through the song “Bring Happiness to the World” that he composed, he intended to convey his hope that Kobe would certainly recover; and highlighted the important role that the music could play in Telling Live Lessons by managing to transmit the hope of disaster victims to other places and times.

■ はじめに

(河田) 阪神・淡路大震災から 15 年。日本では 1923 年の関東大震災以来の大きな被害を被った。このような経験を通じて得られた教訓を活かして次の災害では少しでも被害を軽くしようと、私たちは災害体験の語り継ぎに取り組んでいる。



東京では現在、30 年以内に 70% の確率で首都直下型地震が起こる可能性があるといわれており、その場合には阪神・淡路大震災を遥かに超える大きな被害が想定されている。また、世界各地でも近年大きな災害が頻発している。このような中で、今回、世界各地で災害体験の語り継ぎに取り組んでいる人たちが集まり、それぞれの経験を共有する「世界災害語り継ぎフォーラム」を開催することになった。このことは、災害の教訓を後世にきちんと伝えるだけでなく、災害に対して脆弱な地域に住む人たちの防災にも資するものであり、大変重要なことである。

「防災」にはお金がかかると思われがちであるが、知識、知恵、教訓などのソフト面から被害を軽減するという「防災」の形もある。このフォーラムのテーマである「災害体験の語り継ぎ」も「お金のかからない」防災の方策のひとつである。今持っている大事なものを失わない、つまり一番大切ないのち、それから財産を失わないということが、防災における Sustainability につながるのである。

このような観点から、この鼎談では「災害の語り継ぎ」の意味について考えてみたい。

■ 阪神・淡路大震災のときは？



(エイ・コ) 1994 年に神戸大学に研究生として留学した。阪神・淡路大震災時には大学院入試の直前だった。阪神・淡路大震災時は、地震を知らない留学生たちが住む留学生の寮で被災した。友達 2 名が命をおとし、1 人は大けがをした。ミャンマーでは地震の経験がない。阪神・淡路大震災での初めての被災経験が自分を成長させたと感じる。2005 年にミャンマーに帰国、2008 年にミャンマーで、サイクロンで再び被災した。

(臼井) 阪神・淡路大震災当時は神戸市の教員 12 年目。早朝練習の指導をしていたため 4 時半に起床した。木造 2 階建ての 1 階で朝食を取った後、2 階に上がった時に地震が起きて、1 階部分が完全に倒壊した。一歩間違えばいのちを落としていた。暗闇の中、情報がなく、余震に恐怖を感じ、夜が明けた時には自分が「生かされたいのち」であることを実感した。

「しあわせ運べるように」の歌は、地震から 2 週間経ったときにテレビで三宮の被害状況が映され、衝撃を受け、街に対する愛情がこみ上がってきた想いを表現したもの。神戸の街に子どもの歌声が届けば奇跡が起きるのではないかと、神戸の街によみがえってほしいという想いをこめて歌を創った。



(河田) 阪神・淡路大震災当日は、NHK クルーと一緒に被災地入りした。午前 10 時の時点ではすでに東灘区役所にいて、翌日朝 3 時まで被災地の状況を、ビデオ映像を撮影しながら解説していた。家の下敷きになった人が助けられる現場も取材した。このような映像を撮影することには躊躇したが、現場の被災者の皆さんは、現状を全国に報道をして、多

くの人に助けが必要なことを伝えてほしいと訴え、被災地からの情報発信を続けていた。

■ 震災から15年。阪神・淡路大震災の経験はどう自分の人生に影響を及ぼしているか？
(エイ・コ) 震災で亡くなった友人は、渡米の夢や家族と暮らすという夢を断たれてしまった。大きなショックを受けたけれども、得たものもあった。得たものの1つは、震災を経て「外国人」であった自分が日本社会に受け入れられたと実感したこと。日本にいる知り合いから援助を受け、日本人たちが私達を親戚のように、子どものようにかわいがってくれることを体験した。「外国人ではなくみんなと同じ気持ちになったこと」を経て、今では、「日本のみんなは家族」と思っている。

(臼井) 授業の教え方が変化した。震災以降、学校が避難所となり、いつになれば通常授業に戻れるのか、見通しが立たないまま避難所対応をし、2月末にようやく学校が再開した。震災以前は「教えることがあたりまえ」であったが、授業ができる、ピアノが弾ける、教えるというあたりまえのことができることが、はじめて幸せと感じた。また、歌が広がっていくにつれていろんな人との出会いがあった。今は、歌が各地に広がっていることを追いかけて、歌について語れることを語っている。

(河田) 元々、河川、海岸災害のメカニズムを研究していた。日本経済が高度成長をしていた時代には幸いにして河川や海岸では大きな被害が出る災害が発生しなかったため、防災研究者としてのあり方を再考し、40歳のときに「今後1000人以上の被害が出る災害は、都市でしか起こらないのではないか」という考え、研究テーマを都市災害に変更した。さらに、震災を経て、「防災の研究は最終的には社会の役に立つものであるべきで、被災者を正面に見据えた研究をする必要がある」ことに気付いた。阪神・淡路大震災が起こって我が国の防災研究は「Implementation Science (実践科学) であるべき」ということを神戸から世界に向けて発信してきた。今は、研究や経験は単に個人の財産として持っているだけでなく、これから被災する可能性がある人たちにどう役立てるかということを考えている。

■ 災害体験の語り継ぎの重要性をどう考えるか？

(エイ・コ) 2008年ミャンマーサイクロン災害時に、日本からの義援金配分のサポートなどを行った。その際に、日本で行われた義援金配分のルールなど日本の制度から学ぶ点が多かった。ミャンマーが災害で大きな被害を繰り返さないためにも、様々なことを学び、教育環境を整備し、子どもたちに明るい未来を作ってあげたい。そのためには、他のいろいろな災害の経験から学ぶ点が多い。

(臼井) 今の子どもたちが、何も感じず、何も思わず、1月17日を迎えることには違和感がある。神戸の中でも被害が大きかったところと少なかったところでは温度差があり、その温度差は15年を経て大きくなってきている。一方、「しあわせ運べるように」の名前がついた防災教育の副読本もあり、素晴らしい指導をされる先生に出会った子どもたちは人の痛みがわかる大人になる。そして、生きたくても生きられなかった人たちの感じられる大人になる。震災の悲しい話はたくさんあり、それを感じることができる「気持ちをはぐくむ」ためには、震災の経験を伝えていくことが重要だと思う。

(河田) 研究を通じて社会の役に立つ機会を探り続けている。阪神・淡路大震災の教訓がどう生かされるか、どう生かすのか。教訓は時代とともに変化せざるを得ない面があるが、

それがきちんと伝わるように 防災・減災の政策の中に体験、教訓を刷りこんでいくことが必要だと考える。そのためには、いろいろな形で震災の教訓、体験に触れてもらう努力が必要だろう。人から人への語り継ぎだけでなく、絵や歌、詩を通して後世に「文化」として語り継ぐことも大切なのではないか。

■ 災害体験の語り継ぎを通して何を訴えなければならないのか？

(エイ・コ) 防災教育の重要性を訴えたい。日本は防災教育が進んでいて、学校で子どもたちがどのように避難するかなどについても教えているが、サイクロンのときミャンマーではどこに逃げたら良いかすらわからない人がいた。また、「災害は再び発生する」ということを認知してもらう必要がある。

(臼井) あの時の被災地の想いを歌を通じて語り継いでいきたい。直接語り継ぐのと同じくらい歌や詩などにもパワーがある。歌を作ってから 15 年が経ち、世界で歌が広がり続けている。音楽は色あせない。その時に歌を作った時の想い、その時の空気が曲に絡みついていて何年たってもそれが語り継がれていく。神戸の震災を知らない外国の方が「しあわせ運べるように」の曲を聞いて涙をこぼされた。震災を知らない子どもがこの歌を歌って涙を流す。たとえ歌詞の意味がわからなくても、メロディにあの時の被災地の気持ちや想いがからみついて心に響く。音楽が持っている不思議な力を改めて感じた。

(河田) 災害体験を語り継ぐことは「災害文化」の一つである。災害文化は、昔は **Disaster Sub-culture** と言われていた。それは、災害文化に「地域性」が強く表れていたことを強調したからである。しかし、現在、災害経験の共有はグローバル化しており、グローバルな災害文化の育成が行われている。災害の教訓は国境を超え語り継がれており、また、言葉だけでなく音楽など様々な形で語り継ぎが行われている。したがって、今では「Sub-culture」ではなく「Culture」というべきであると主張している。互いの経験を共有することにより、世界各地で災害文化が形成されていくことを願っている。

写真：表 Photo: Omote